

序 本研究の概要

1. 研究の目的

本研究は、地域において発生する生活環境問題に対応して展開されているボランティア活動の相談や調整、プログラム開発などの場面（ボランティアコーディネーション）で生じている困難事例をフィールドとする臨床研究である。ボランティアコーディネーションでの困難性は、具体的にはボランティアコーディネーターの揺らぎやジレンマの語りとして可視化するが、本研究では、場面・主体・内容など多様化を極める困難事例を総称してチャレンジケースと呼ぶ。また、本研究で扱う困難性は、単なるコーディネート技術の不適用によって発生するものといったレベルの問題ではなく、未知の領域を切り開くべき使命を持った課題性という意味で捉えている。それ故、「Challenged チャレンジド¹⁾」といい、その対応はコーディネーターのスキルやパーソナリティの課題といった個別性特殊性を越えた社会構造的なものとして捉え直さなければならない類のものである。このことは個別コーディネータースキルが不問だということではなく、社会構造的なものへの捉え直しから逆にコーディネータースキルの意義や内容が再構成されるという順列になるということである。

ボランティアの調整や相談場面等において、何故コーディネーターは困難性を抱えるのか。その困難性は、どのような局面で如何なる内容として発生するものなのか。こうした困難性とは、誰にも一様に確認できる客観的指標を持って存在しているものなのか。それともボランティアの調整、相談場面等というボランティアやボランティア利用者、ボランティアコーディネーターの三相の相互作用が働く「場²⁾」において、ボランティアコーディネータ

ーによって主体的に構築されうるものなのか、という問い掛けも包含している。本研究では基本的に後者の立場を取りつつ、その一般性への拡張可能性をも研究の射程に置いている。そして、チャレンジドケースの構造・分類分析を通してデータベース化を試行しつつ、ボランティア活動の強みと弱み、ポジティブとネガティブ、ボランティアする側とされる側、等々といったその両義性を取り込んだ理論枠組みを提示している。また、ボランティアマインドに溢れ福祉的機能をビルトインした福祉社会を形成していく動力としてのボランティアセンターなどの社会システムについて検討するとともに、ボランティアコーディネーションにおけるボランティアコーディネーターの具体的な実践課題について考察している。

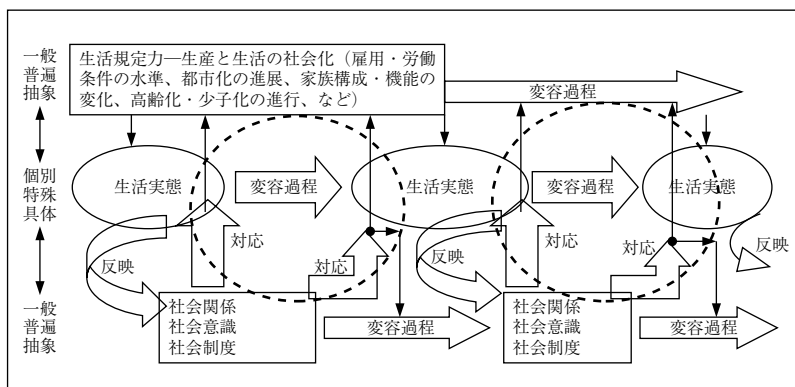
2. 研究の特徴

ボランティアコーディネーションでの困難性は、これまで、ボランティアニーズの増大や、サービス提供者や利用者、コーディネーターなどのボランティア理解のあり様、需給調整場面のスキル、ボランティア資源の量・質の実態など、様々な場面が困難発生要因として語られてきた³⁾。また、近年では、障害者や高齢者、子どもなど従来ボランティアの受け手と解されていた階層のボランティアする側への主体転換がもたらすマッチングの困難性にも新たな関心や注目が集まっている。本研究は、ボランティアコーディネート場面において発生する困難性の社会構造的な理解に立ちつつ、まずはその困難性の発生因子をボランティアとボランティア利用者、ボランティアコーディネーターというボランティア活動当事者の実感・感覚・体験・経験によって言語化を試みる⁴⁾。そしてこのことによって、ボランティア活動の実相や理解の豊富化に貢献すること、そしてボランティアコーディネーションの「場」で発生している困難性の解決や克服に対応するアクションプログラムの開発を検討すること、という臨床的研究方法の提起に特色と意義があると思われる。

ボランティア活動の展開基盤は変容する時代の最先端を切り取るポジションにあるともいえる領域である。この領域は住民の生活様式や社会意識、社

会関係、社会制度と現実の暮らしとの激しい乖離・矛盾が象徴的に可視化する領域である（図1）。新しい矛盾とそれに対応する社会システムは、現実には展開されるボランティアプログラムに原初的な萌芽形態を見る、と私たちは捉える。ボランティアコーディネーション場面で生じている対応困難な問題やニーズの発現場所の中にこそ、次代の「社会」が胎動している、と私たちは仮定する。本研究が困難事例を称してチャレンジドケースと呼ぶのは、ボランティアアプローチによる新たな市民社会実現への希望の掛け橋的な意味を込めているからである。

図1 生活実態の変容過程とボランティア活動領域



3. 関連研究での位置付け

このフィールドについては、近年ボランティアセンターの統括組織やボランティアコーディネーターの職能組織で貴重な実践的提起や実態調査などの先行業績がなされている。ボランティアコーディネート場面での対応技術の向上に着目した研究成果もある⁵⁾。

私たちの今回の研究は、こうした先行業績に学びつつ、ボランティア活動でのインターク場面での困難事例（チャレンジドケース）に着目する事によ

って、専門職の対応技術の豊富化というスキル面と共に、ボランティアの価値や知識、技術が絶え間なく更新し、循環する新しい社会システムをも射程に収めている。

ボランティア活動に作用する規定力は、ボランティアコーディネーターというスキルだけではなく、有償・無償や自発・強制、専門家・非専門家、組織・非組織、利他・利己、エリア・テーマといったボランティア活動内部に機能する力やボランティア「する」側・「される」側の力学、社会制度とボランティア活動との相互関係、そして現実社会のボランティア受容力とでもいべき規定力もある。

ボランティアコーディネーションでの困難場面（チャレンジドケース）を素材に、こうしたボランティア活動に作用する力が縦横無尽に交錯する「場」の構造を可視化する作業が求められる。この「場」の構造的把握によって、実践的にはボランティアコーディネーションでの対応スキルの高度化・豊富化と同時にボランティア活動に働く正負の推進力あるいは抵抗力がある対応プログラムの開発研究に貢献するのではないかと考えた。本研究はボランティア活動を規定するボランティア活動に関する制度政策や意識など諸環境を対象とし、その構造が可視的現象として現れるのが、ボランティアとボランティア利用者、そしてボランティアコーディネートによって構成されるボランティアコーディネーションのフィールドであると仮定している。さらに、具体的なボランティアの展開場面でのプログラムの開発も重要な研究領域と位置づけている。

4. 本研究の経過

本研究「ボランティア相談場面におけるチャレンジドケースの臨床研究」の研究課題は、ボランティア及びボランティア活動の社会構造的把握を臨床的アプローチによって試みつつ、ボランティアの困難事例（チャレンジドケース）の事例検討とそのデータベース化を行うことであった。ボランティアコーディネート場面での困難性発生領域における事例検討とデータベース化

という研究作業は、具体的には以下のフィールドを協力組織として行ってきた。

1) チャレンジドケース

私たちは本研究に先立って、既に京都府下、社会福祉協議会ボランティアセンター、京都のNPOなど市民活動・ボランティア活動振興団体、医療生協傘下の病院・診療所・介護施設、などの協力を得ながら、チャレンジドケースについての事例集約を行ってきたが、さらに滋賀県下の社会福祉協議会ボランティアセンターや京都市内の特別養護老人ホームからも事例の収集をはかった。そして収集されたチャレンジドケースについての分析検討を行ってきた。これらの事例は、合計すると106事例に及んだ。内訳を示すと1) 京都府下の社会福祉協議会ボランティアセンターの事例60ケース（2002年10月以降⁶⁾、2) 京都府下のボランティア団体、NPOなどから14ケースの事例（2003年05月以降）、3) 医療生協傘下の病院・診療所・介護施設から14ケース（2003年09月以降）、4) 滋賀県下社会福祉協議会ボランティアセンターの事例13ケース（2006年04月以降）、5) 京都市老人福祉施設協議会加盟の施設（特養）から5ケース（2005年6月以降）、の5領域で106の事例を得る事が出来た。この作業によって、構造的な課題の発生現場となっているボランティアコーディネーターの業務の範囲と環境について具体的に抽出が可能となった（本書第3章参照）。

2) サクセスケース

また、私たちは本研究の一環で、チャレンジドケースの範疇ではあるが、困難ではあったけれども活動や支援が成功した58ケースも集約分析検討の対象としてきた⁷⁾。これら58のケースはサクセスケースとして、チャレンジドケースとは集約の方法や内容も異なっているが、本質的には、これらサクセスケースもまた困難性の発現形態であってチャレンジドケースといってもいい。本書には収録することが叶わなかったが、その一覧表を巻末資料に収めているので参照して欲しい。私たちのチャレンジドケースの研究とは、ボラ

ンティアコーディネーターが相談場面で遭遇した困難性を主要なフィールドとしているのであって、その相談案件への対応が成功したとか失敗したとかいうレベルでの結果を問うものではないからである。事例収集対象をこの領域場面に拡大し、データベースおよび理論モデルのさらなる精緻化を目指すと同時に、チャレンジとサクセスの臨床研究を通して経験知と専門知の循環的帰納的理論構築に関する方法論⁸⁾についての検討を行ってきた。

また、ボランティアコーディネーターの重要な実践モデルとして、チャレンジドからサクセスへの移行というモデルを提示することに積極的な実践的意義があるのでないかということから、Jaan Valsinerの複数経路・等至点モデル⁹⁾ (Trajectory Equifinality Model : TEM) の応用可能性について検討を行った。

3) ボランティアの「強み・弱み」

また、本研究では、チャレンジドケースの発生にボランティアイメージの両義性も大きく影響していることも大きく影響していることから、ボランティアイメージの今日性についての調査も行っている。関連する先行調査では、この課題は「ネガティブ・ポジティブ」イメージ調査としても既に優れた研究もあるが¹⁰⁾、本研究では、ボランティア活動に現われる「強み弱み」を指標とすることで、ボランティアイメージの両義性にアプローチしてみた。

ボランティアの「強み・弱み」調査は、幾つかのボランティア教育プログラムに参加した受講生及び受講生からなるチームに強み弱みを自由記述によって調査したものであるが、2002年度から2006年度まで継続して行ってきた(本書第1章)。

4) チャレンジドケースの集積分野—心の病を持つ市民のボランティアニーズと障害児の放課後保障の活動—

これらチャレンジドとして把握された106ケースから、チャレンジドの発生を構造的に包含していると思われる分野として特定しながら、その分野におけるボランティア活動の実態把握や推進方策についても一定の研究作業を

行なってきた。こうした分野として集約され個別検討の対象となったものが、心に病のある市民のボランティアニーズと障害のある子どもの放課後保障に取り組む活動である。いずれもがここ数年、ボランティアセンターに寄せられる相談が増えている内容である。量的増加と共に、社会資源やボランティアコーディネーターの対応スキルの蓄積の未成熟もまた困難性を高める要因となっている。

5) ボランティアと教育プログラム

さらに、本研究では、教育とボランティアとの関連についても主要な問題関心を持って研究素材としてきた。近年、教育とボランティアの関係や結合のあり方が様々に議論されるようになってきているが、これもまた、ボランティアコーディネーターの現場では困難性発生要因となっていた。ボランティア原理として特段に重視されてきた自発性・主体性の原則と学習・教授という教育の關係に根本的な矛盾を内包しているのではないかという懸念である。私たちの所属する大学ボランティアセンターをフィールドとしてこの課題にも対応するための研究作業を配置して検討してきた。特に、教学的観点から学生にとってのボランティア活動の意義を明らかにしつつ、講義演習実験と並び立つ教育手法としてボランティア活動を含む多種多様な体験的教育活動をいかに理論化しうるかという課題に焦点化しながら研究作業を続けてきた¹¹⁾。こうした体験的教育活動は、実習やインターンシップ、フィールドワーク、スタディツアーなどとして驚くほど豊富に具体化されているが、これらの教育活動をサービス・ラーニングという教育手法として再構成するならば、その教育コンテンツの吟味と環境整備の考察は不可欠である。本研究では、派生的に研究の芽出しをしたに過ぎないが、重要な課題として指摘しておきたい（本書第4章）。

【注】

- 1) 本研究で言うボランティアコーディネートの「場」で発生する困難性とは、単なる技術的不適応によって発生するものといったレベルの課題ではなく、

未知の領域を切り開くべき使命を持った課題性という意味で捉えている。それ故、「チャレンジド」という。Challengedは身体に障害のある、という意味で、disabledの遠回し語として使用されているが、日本でも障害のある市民を、挑戦すべきことを与えられた人たちとして、新たな課題に果敢に挑戦している市民という意味で「チャレンジド」と呼称することを提唱している団体もあり、こうした実践にもヒントを得ている。

- 2) この「場」とは、関連する諸機能が様々に交差し、相互作用の力学が働く時空間という意味で使用している。石倉康次は、P.ブルデューの以下の文を紹介し、社会福祉事業の「場」の構造を説明している（石倉『転換期の社会福祉事業と経営』かもがわ出版、2002、pp.20～33）。「われわれは社会をさまざまな場のある種の体系として考えるから、体系やさまざまな関係性の見地から考えねばならない」「場はさまざまな力の場であり、同時に人々が構造を変えるために戦う場です」
- 3) この分野における研究成果には以下のようなものがある。NPO日本ボランティアコーディネーター協会編『ボランティアコーディネーター』（筒井書房、2002年）、『ボランティア・コーディネート』（日本青年奉仕協会、1997）、巡静一『実践ボランティア・コーディネーター』（中央法規出版、1996年）、筒井のり子『ボランティア・コーディネーター』（大阪ボランティア協会、1995年（第2版））
- 4) 津止正敏・斎藤真緒『ボランティアの臨床社会学』（立命館大学人間科学研究所、2003年）において第1段階のまとめを行なっている。
- 5) 全社協『ボランティアコーディネータースキルアップシリーズ』
- 6) この60ケースについては津止・斎藤編著『ボランティアの臨床社会学』（立命館大学人間科学研究所、2003年）に納めている
- 7) 日本ボランティア学会大会（2004年6月、長野県）にて斎藤真緒が「サクセスモデルの研究」と題して報告している。
- 8) Donald Schon ドナルド・ショーン『専門家の知恵—反省的実践家は行為しながら考える—』（佐藤学・秋田喜代美訳）ゆみる出版、2001年に多くを学んだ。
- 9) Valsiner, Jaan, 2001, *Comparative study of human cultural development*, Fundación Infancia y Aprendizaje.
- 10) 小澤亘『「ボランティア」の文化社会学』世界思想社、2001年
- 11) 立命館大学ボランティアセンターにボランティア・サービス・ラーニング研究会（VSL、代表津止正敏）を組織して研究を継続している。